2W-86
特67
951

此の書の仕組

此の書は日露戰爭を經て世界の一等國の列に進んだ新日本はどんなものであるか又世界に於ける新日本の地位はどんなであるかといふ事を年少の人々に知らせて「われ等はいかに幸福なる國に生れたるよ」との觀念を與へ又「われ等は益有望なる新日本を組織すべき未來の國民なるぞ」との自覺を起させて忠君愛國の念を益盛にさせようが爲めに書いたものであります

一、此の書は全編を四つに分けて

第一編　紀元節の日
第二編　卒業式の日
第三編　夏休みの日
第四編　天長節の日

としてあります

明治
41 4 30
外交

一、第一編は紀元節の日に起つたお話で我國建國の由來から世界に二つとない國體を說き其の面積及人口を世界の强國と比較して知らせてあります

第二編は卒業式の夜一家團欒のをりにあつたお話で日本の軍備と列强との比較を知らせてあります

第三編は夏休みの日の中にあつたお話で日本の實業と列强との比較を知らせ且日本の政治の事を知らせてあります

第四編は天長節の夜祝賀會を開いた時のお話で兩陛下の聖德の一班を知らせ又日本人の忠孝の實例を擧げ終りに敎育勅語によつて國民道德の基礎を知らせてあります

一、此書は子供の澤山ある或一家を借りて來て問答體に書いてありますこれは一つには年少の人々が自分と比べて見て面白く讀む樣にし又一つには同じ事を幾度も繰返して、自然と覺えられる樣にしたのであります

一、此の書は書中に出るそれぞれの子供の習つて居る書物や學力等を調べて書いたのでありますからこれに相當する年級の子供等にはよい試金石ともなるのであります

一、此の書は全編を通じて敎育的に書いてありますから學校敎育幷に家庭敎育の良い材料となるであらうと思ひます

一、此の書は全編四冊を通讀すれば新日本を知る事が出來るのは勿論でありますが「新日本問答」と名づけてこれを簡約したものを「續編」としてありますから全編通讀の後更にこれを讀めば最確實で明瞭な觀念を得る事が出來ます

一、此の書は正確の事實を調べ又最近の統計に由つて書いたのでありますから年少の人々には勿論苟も新日本を知らうとする人々の爲めには今出來て居る書物の中では最便利で且最適當であらうと思ひます

明治四十一年二月

著者しるす

はしがき

これは、花子さんを頭に、五郎さんまで、七人のお子供衆のある、朝日さんのおうちであつたお話で、時は明治四十一年、西暦でいへば、千九百〇八年三月の事であります。

一番上の花子さんといふのは、高等女學校の四年生、次の太郎さんは中學校の一年生、次郎さんは高等二年生（新制の尋常六年生）で、三郎さんは尋常三年生、其の次の靜子さんは尋

常一年生、次の四郎さんは四月から學校へ上らうといふお子、次の五郎さんはまだやうやう五つで、四郎さんと一緒に幼稚園にいつて居るのであります。皆さん、そのお積でお讀なさい。

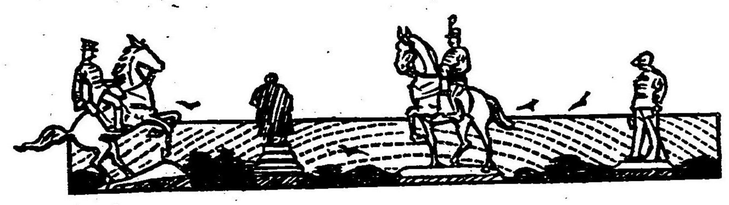
校外讀本

新日本　第二編

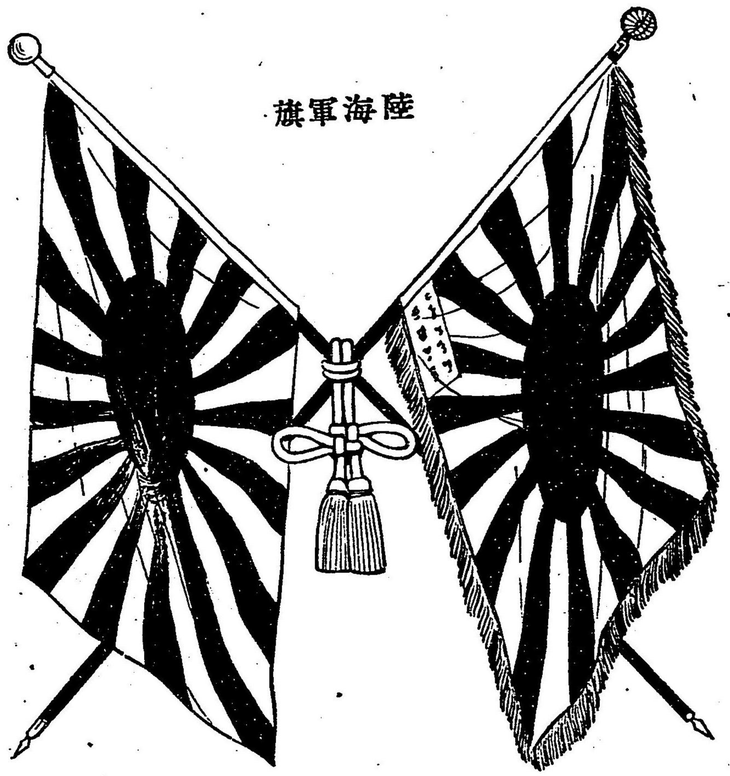
文學士　吉岡郷甫閲
戸野みちゑ著

卒業式の日

紀元節の日にお話がありてから、四十日餘りもたつて、いつか三月の末になりました。けふは、學校の卒業式の日で、二郎さんも、三郎さんも、靜子さんも、朝早くから學校へ參りましたが、皆成績優等で、品行も人の模範になるといふので、賞



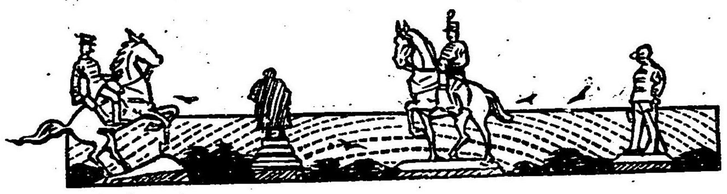
狀や、賞品をいたゞいて、お午頃元氣よく歸つて來ました。お父さんも、お母さんも、大層な御滿足で、お夕飯には、お祝ひにいろいろ、御馳走をなさいました。みんなは樂しく食事をいたしましたが、其の



後で、次の樣な話がはじまりました。

『母』みんなが、平生から、よく先生のおつしやることをきいて、勉强するものだから、けふは、二郎ちやんも、三郎ちやんも、靜ちやんも、みな優等でよかつたねえ。母さんも嬉しい。お父さまも非常にお喜びだよ。』

『父』うむ、みんなよかつたねえ。お母さんのおつしやるやうに、みんなが平生から、能く先生のおつしやることを聞くし、又、お母さんのおつしやる事にも、背かないから、それでいいんだ。何



でも勉強して、立派な人にならなければいけないよ。』

花子『みんなが揃つて御褒美を戴くなんて、眞實に目出度われえ。太郎さんも、又一番でせうよ。』

太郎『姉さんだつて、優等に違ひないよ。』

父『あは、、、姉さんも、兄さんも、大方さうだらう。それに、能く弟や妹を大事にして、可愛がつてやるから、皆も仕合だ。』

女中『ほんとうにまあ、皆様がお揃ひ遊ばして、御發明で、そしておやさしくていらつしやいます

から、旦那さまや奥さまは、嘸お樂みでいらつしやいませうねえ。』

母『四郎ちやんも、もう五つ程寢ると、學校へ上るんだね、嬉しいでせう。』

靜子『四郎ちやんは、お隣りの清ちやんと、一しよに上るのだね。お連れがあつて、いいのね。』

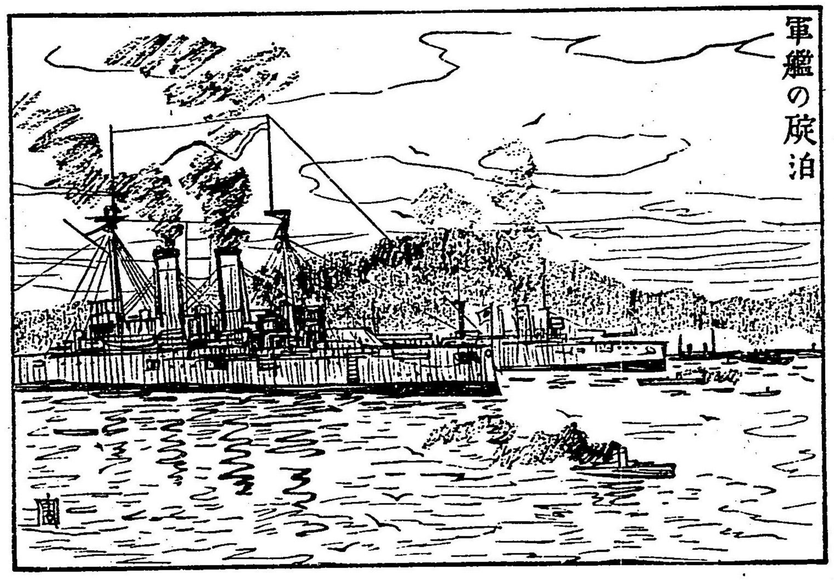
四郎『えゝ、清ちやんと、一緒にいくの。もう五つ程寢ると、學校へ上るのかなあ。嬉しいく。學校へ上ると、いろんな遊戯を、するのだね。二郎ちやん、學校では、軍艦遊戯なんかも、するのでせう。

いつか、軍艦のお話を、三郎ちゃんにしてもらつたね。そら、あの畫本を見てさ。

三郎『さうだつたつけ。僕、覺えないよ。軍艦つていへば、お父さん、日本には、幾艘位軍艦があるのでせうかねえ。』

父『うむ、それは中々澤山あるよ。只軍艦軍艦といふけれども、又其の中に、種々な軍艦があるよ。』

二郎『僕習ひましたよ。軍艦には、戰艦もあるし、巡洋艦もあるし、驅逐艦もあるし、砲艦もありませう。』



父『中々能く知つてるね。』

母『それから、まだあるでせう。』

二郎『……』

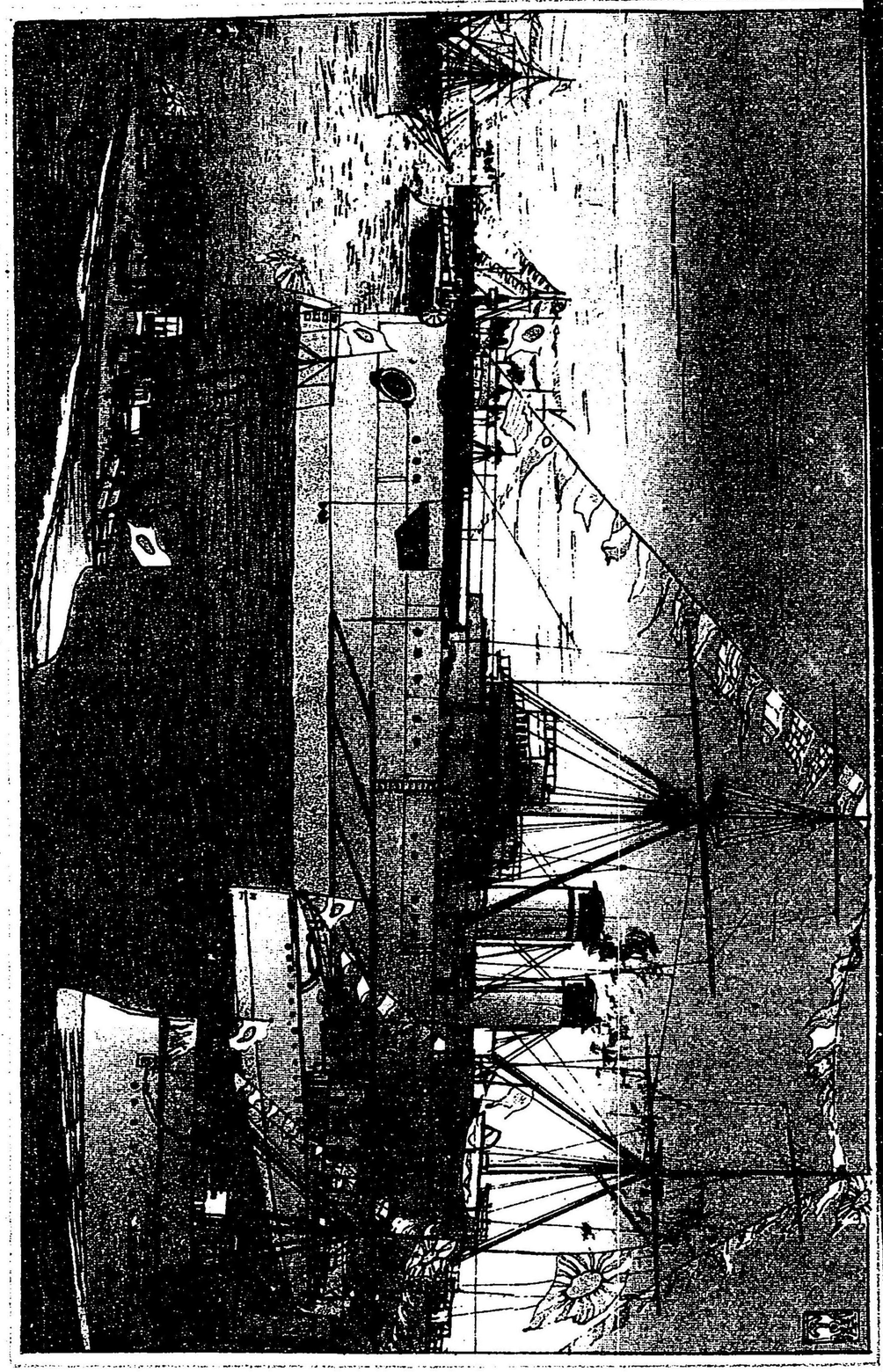
太郎『まだ海防艦もあれば、通報艦もあり、それから水雷母艦もある。』

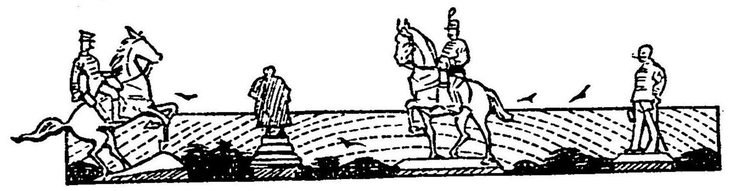
四郎『軍艦にも、いろ〳〵あるもんですね。戰艦つて、どんな軍艦だらう。』

二郎『戰艦は、軍艦の中で、一番きつい軍艦でね、戰爭ばかりするのだよ。敵の砲臺でも、軍艦でも、どんどん壞してしまうのさ。安藝や、薩摩やなんかは戰艦だよ。』

四郎『ぢやあ、巡洋艦は、なににするのかい。』

二郎『巡洋艦は、軍艦の中で、一番役目の多い軍艦でね、平時は、海を見廻つて氣を付けて居るし、戰爭の時には、敵の運送船を奪つたり、又運送船を守つてる軍艦を、攻めたりするのさ。それだから、速く、長い間走れる樣に、石炭なんかも、澤

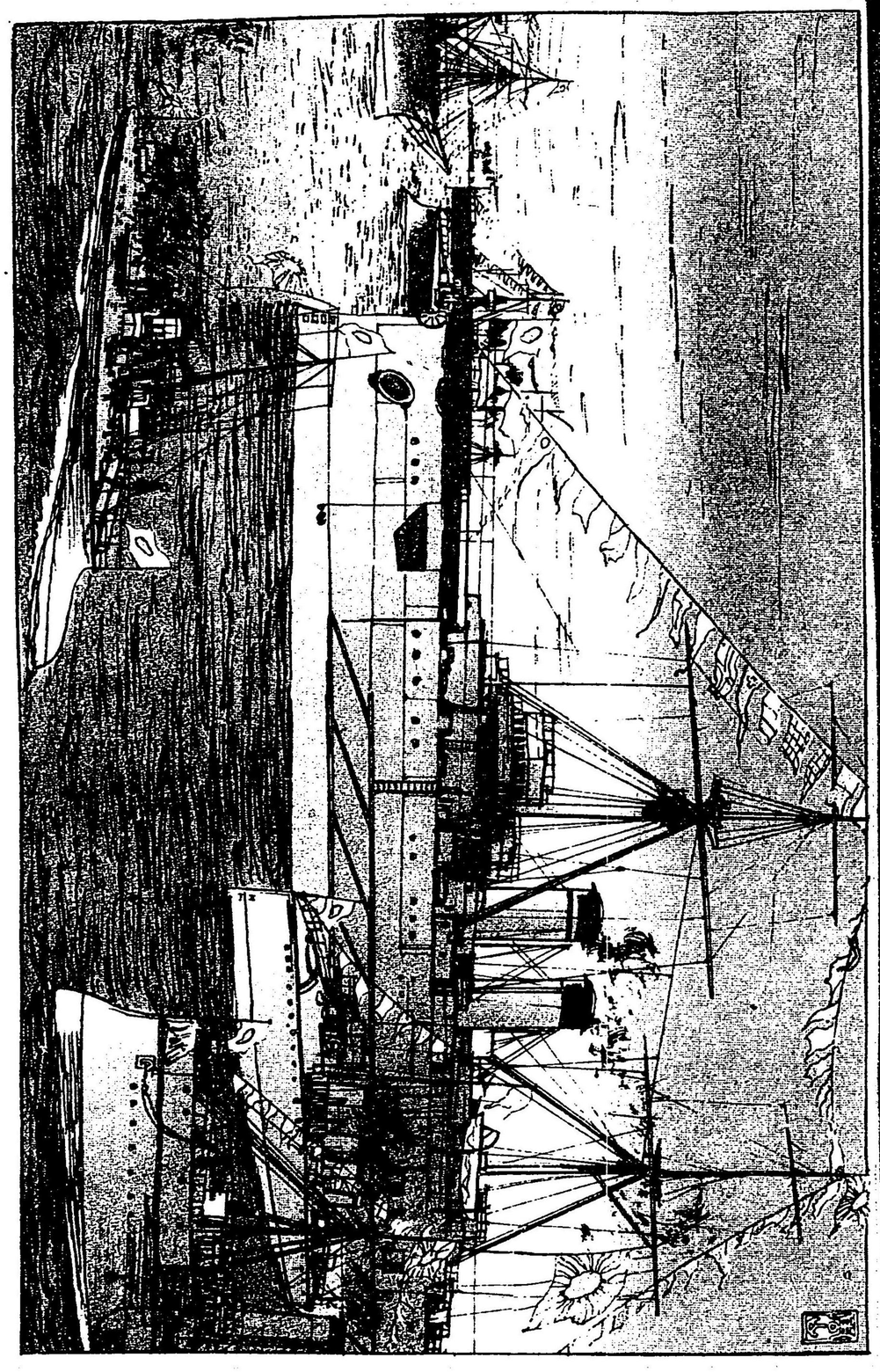




二郎『戰艦は、軍艦の中で、一番きつい軍艦でね、戰爭ばかりするのだよ。敵の砲臺でも、軍艦でも、どんどん壞してしまうのさ。安藝や、薩摩やなんかは戰艦だよ。』

四郎『ぢやあ、巡洋艦は、なにするのかい。』

二郎『巡洋艦は、軍艦の中で、一番役目の多い軍艦でね、平時は、海を見廻つて氣を付けて居るし、戰爭の時には、敵の運送船を奪つたり、又運送船を守つてる軍艦を、攻めたりするのさ。それだから、速く、長い間走れる樣に、石炭なんかも、澤



水雷艇

長崎港淡水

海軍

山積めるやうに出來てるんだよ。鞍馬や、津輕は巡洋艦だよ。』

太郎『僕が一つ、其の外のを說明してやらうか。』

父『さうだ、太郎、よくわかる樣に言つて御覽。』

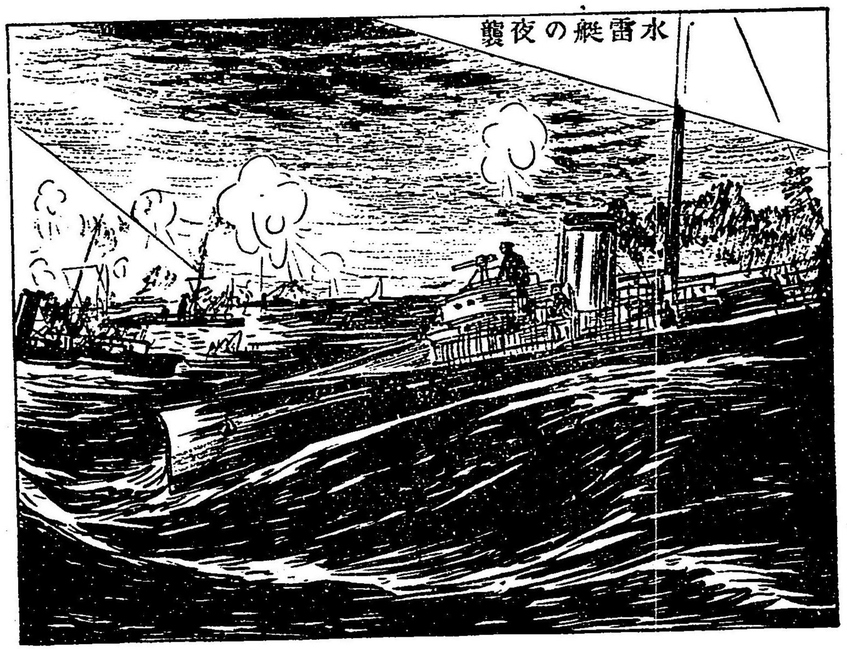
太郎『はい。まづ海防艦からいはうか。

海防艦はね、自分の國の海岸を防禦するのだ。それだから、速く走れなくつてもいいし、石炭も餘計に積めなくつてもいいんだ。又、海の淺いところを乘り廻すのだから、底も淺く出來て居る。それから、

砲艦はね、戰爭の時には、河や海の淺い處へはいつて、敵の軍艦や、砲臺を壞すのだ。それで艦が小さくて、これも底が淺く出來てるよ。それから、

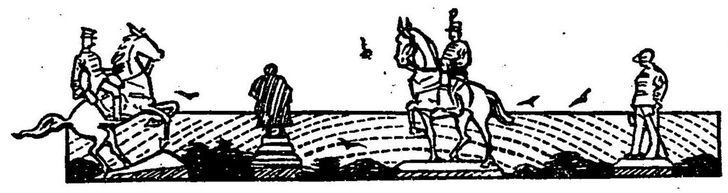
通報艦はね、敵の軍艦や、海岸の防禦の模樣をさぐつたり、又、味方の軍艦の命令や、通信を取次いだりする役をするのだよ。次に、

水雷母艦といふのはね、味方の水雷艇に、水雷や、彈丸や、食物などを供給つたり、水雷艇の壞れた時に、これを修繕したりするので、驅逐艦



といふのは、敵の水雷艇を攻擊したり、追つかけたりして、これを壞すのだ。三郎ちやん、水雷艇を知つてるの。

三郎『水雷艇なら、僕知つてるわ。水雷艇は小さくて、速くて、霧や雪の降る日や、又暗

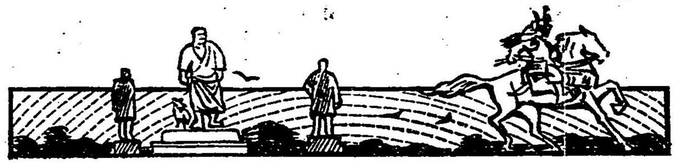


い夜なんかに、敵の軍艦を、こはしに行くんでせう。』

母『さう〳〵、よく知つてますね。』

靜子『あたしだつて知つてますよ。こゝからあすこ迄位の大さの、お魚みたいな形したものでせう。』

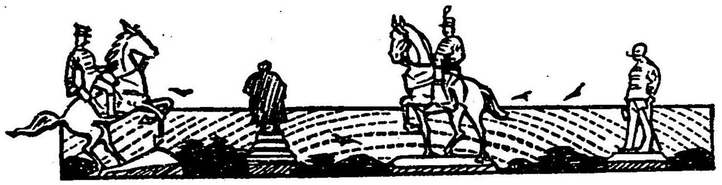
太郎『それは、水雷といふのだよ。水雷艇はあれを射て、敵の軍艦をこはすのだ。水雷艇は船だよ。あんな小さな魚みたやうなものに、人は乘れないだらう。』



二郎『さうだ、あれは魚形水雷だ。博覽會にもありましたね。』

父『軍艦のお話が、水雷に飛んだね。ところで太郎、お前のさつきの話は、みんな善かつたが、海防艦や砲艦には、どんなものがあるか言はなかつたね。それは分つてるか。』

太郎『さうでしたね。海防艦には、比叡、高雄のやうなのがありますし、砲艦には、宇治、磐城のやうなのがあります。通報艦にはどんなのがありましたかね。』



父『うむ、姉川や滿洲なんていふのは、通報艦だよ。』

五郎『滿洲か、僕、お正月の福引でとりましたれ。滿洲といふので、大きなお饅頭を。だから、よくおぼえられるよ。』

皆々『アハ、、、、オホ、、、、。』

母『いろいろ軍艦のお話が出ましたれ。それで軍艦には、戰艦に、巡洋艦に、海防艦に、砲艦に、通報艦、水雷母艦、驅逐艦なんぞと、いくつも種類があるし、外に水雷艇もあつたれ。此水雷艇の種類に、潛航艇といふものもありますよ。これは海の中を潛つて行く船で、晝間でも、敵の軍艦を攻擊することが出來るのです。みんな善く覺えていらつしやいよ。』

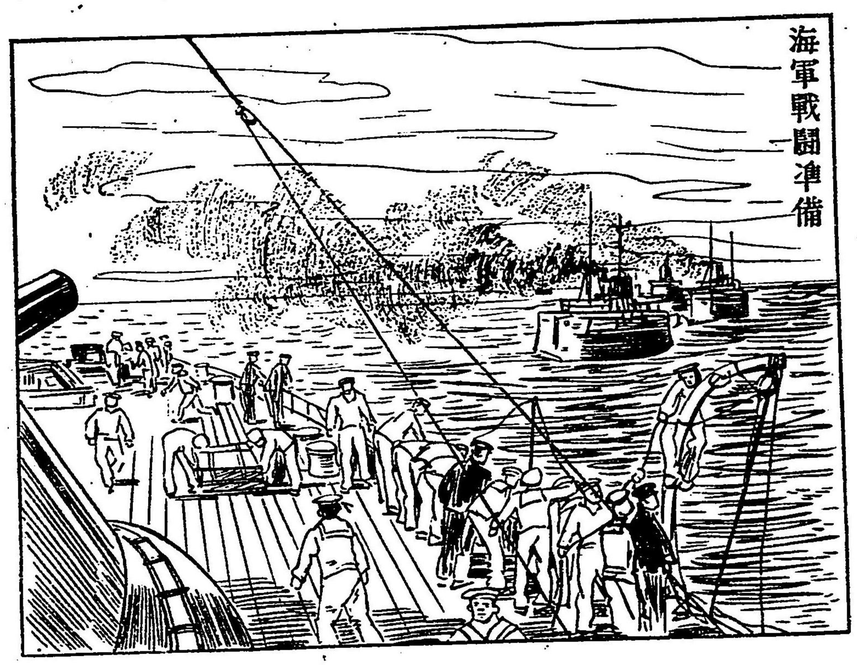
父『太郎は、日本には幾艘位、軍艦があるか知つてるか。』

太郎『たしか、八十艘位だつたかと覺えてゐます。』

父『花子はどうだ。』

花『私は、八十艘よりは、もすこし多いかと思つて居ります。』

父『うむ、八十艘といふのは、五六年も前の事だら



海軍戰闘準備

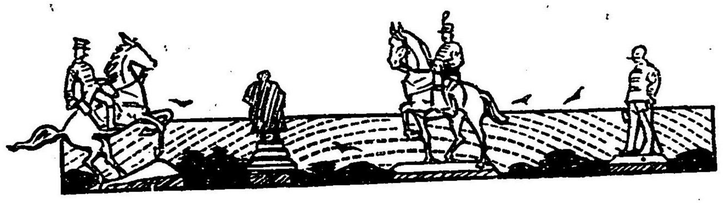
う。二三日前、或海軍の將校に聞いたがれ、その男の話に由ると、三十九年の末には、軍艦が百二十艘、其の時製造中といふのが、七艘で、水雷艇が七十八艘だといつたよ。潜航艇は、海軍で非常に秘密にして居るから、わか

らないが、まあ何でも艇と名のつくもの丈で、百二三十艘もあらうかと、お父さんは思ふんだ。それから、まだ其の將校の話に、三十九年の末には、かうだつたが、其の後製造中のものも、だんだん出來たしするから、皆では、軍艦が、百三十艘程も、あらうかといつて居たよ。』

太郎『隨分ありますれえ』。

二郎『世界中で、軍艦の數を比べたら、日本は何番目位でせう。』

母『只數だけで何番目ときめても、強い弱いは分



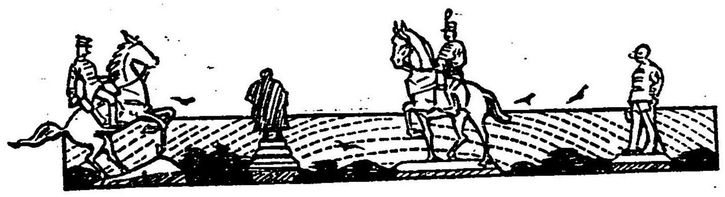
りませんよ。噸數で比べるのですよ。』

三郎『一寸母さん、噸數つて何の事です。』

太郎『僕が言つてあげようか。噸といふのはね、英吉利の衡目の名で、一噸は日本の二百七十一貫に當るのだ。さうして、此の噸で、軍艦の重さをはかるのだから、同じ軍艦といつても、一万噸以上のものもあれば、又五千噸以下のものもあるのだ、同じ一艘でも、一万噸の軍艦と、五千噸の軍艦とでは、大變働きが違ふだらう。だから、軍艦の數ばかりでは、強い弱いといふ事は、

分らないのだよ。噸數が大切なんだ。小さな艦ばかり澤山あつても、大きな艦の數の、少いものゝ方が、強いかも知れないでせう。』

父『兄さんのいふ通りだ。各國の海軍力は、噸數で比較するのだ。噸數でいふと、今、日本は、大方五十万噸位はあるだらう。世界中で五番目なんだ。世界の七大海軍國といつてれ、海軍で強いのが、英國に、獨乙に、米國に、佛蘭西、露西亞、伊太利と、日本との七個國だが、日露戰爭前迄は、日本は凡に二十六万噸で、この七大海軍國の、一番



しまひの七番目だつた。それが戰爭後には、一足飛に五番目に上つたのだよ。』

三郎『中々えらい。二郎ちやんが、海軍大將になる頃には、日本は何番目位になるかなあ。』

父『さあ、皆で、あてつこをするかな。』

皆々『あはゝ、おほ、、、、』

二郎『海軍で、一番強いのは何國ですか。』

太郎『そりや英吉利さ。』

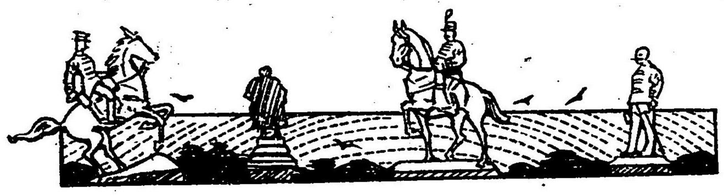
三郎『その次は。』

太郎『一番目は、獨乙か佛蘭西だらう。どうですか、お

父さん。』

父『さうだ。第一は英吉利で、第二は佛蘭西、第三が獨乙で、第四が亞米利加、第五が日本で、第六が伊太利、露西亞は、今は一番しまひの七番目になつたのだ。併し、露西亞も熱心に、海軍力を回復しようとして居るから、このまゝではをるまいよ。』

二郎『日本の海軍力や、各國との比較は、わかりましたが、何でも日本では、軍艦があちこちの軍港に分けて、何艦は何軍港附屬とかいふ事にな

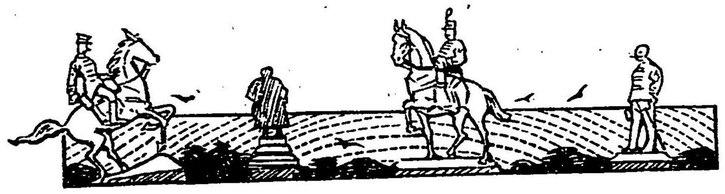


水兵の操練

つて居りましたれ。

太郎『さうだよ。日本の海軍區は、第一、第二、第三、第四の四つと、關東州海軍區とに分けてあつて、一區毎に一つの軍港がある、そして其處には、鎮守府が置いてあつて、軍艦は大抵何鎮守府所屬といつて、鎮守府についてゐるんだよ。軍港についてゐるのではないよ。そして附屬といふのではない、所屬といふのだよ。』

三郎『あゝ、舞鶴は軍港だらう。僕の國だからよく知つてるわ。』



太郎『さう、舞鶴も軍港だよ。軍港にある鎮守府には、大將か中將かを頭に、それぞれの軍人が居て、海軍の事を世話して居るのだよ。』

といつて居ますと、さつきから默つて聞いて居た五郎さんが、何と思つたか、いきなり大きな聲で

五郎『マツサキカケテ突進シ、敵ヲチサンザン殺シタル、……』

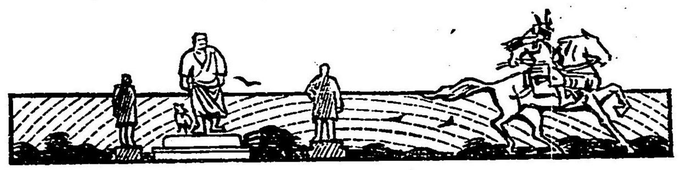
といひだしたので、皆が思はず笑つて、五郎さんも、やつぱりいくさの事を、言つて居るのだと、思つてるのでせうかなんて、いひあひました。やがて二郎さんは、

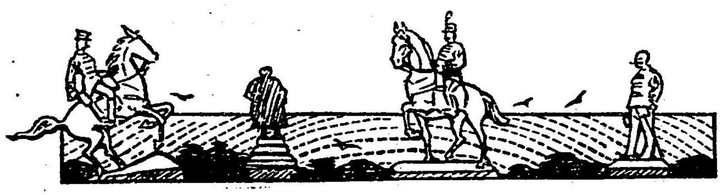
二郎『一体軍人つて、何万人位あるのでせう』。

母『海軍の軍人かい。それはね、五六万人程ありますよ』。

三郎『ぢやあ、陸軍の軍人は、どの位です』。

母『陸軍は、大層澤山ありますよ。平時は、二十二三万人もあるでせうか。これは、やはり非常に秘密にしてありますから、よくは分らないのですよ。戰爭でもあつた時に、出る人の數は、まだ





まだ澤山ありますよ。』

三郎『二十二三万でも、隨分澤山ぢやありませんか。』

二郎『それぢやあ、その二十二三万の人が、師團に分けてあるのですか。』

父『さうだよ。陸軍では、海軍で軍港に軍艦の居るやうに、大事な土地に師團があつて、……』

三郎『むゝさうだ、九段に近衞師團がありますね。』

靜子『山田の伯父さんは、名古屋の師團長でせう。』

父『さうだ〳〵、あの伯父さんは、えらいんだよ。』

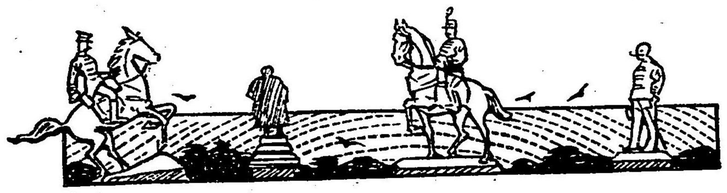
三郎『僕はもつとえらくなるんだ。伯父さんは中將だけれど、僕は元帥になるんだもの。』

母『ほ、、、、、三郎ちやん大威張だね。それぢやあ、師團は日本にいくつあるか、知つてるの。』

三郎『そんな事、知りませんね。僕まだ小さいんですもの。』

二郎『僕は母さん、學校で習ひましたよ。陸軍といふところにありました。何でも十二師團と思ひましたよ。』

花子『それは日露戰爭前の事でせう。今は十八師團になつたと、先生から伺つたのよ。ね、母さま、さ



四郎『それぢやあ、六つふえたのだねえ。』

母『四郎ちやん、能くお勘定が出來たね。日清戰爭前迄は、六師團であつたのが、戰爭後には、六つふえて十二になり、又日露戰爭後に六つふえて、十八師團になりましたよ。』

三郎『隨分ふえたんですねえ。』

太郎『非常な膨脹ですねえ。』

母『この十八師團には、司令部といつて、海軍の鎭守府みたやうな役所が置いてあるのです。そ

して、全國を十八師管區にわけて、各師團司令部で、その區の中の事を、世話してゐるのです。此の外に、近衞師團があつて、これは宮城をお守りするので、他の師團とは違ひますよ。』

二郎『さうすると、日本には十八師團と、近衞師團とあるのですねえ。』

太郎『その外にまだあるよ。臺灣には、臺灣守備隊、南樺太には、樺太守備隊といふのがあるよ。併し、これは、みんな十八師團の中から、代る代る、少し宛いくのだよ。』

父『みんな、中々能く知つてるね。面白い〳〵、お父さんは、久しぶりで皆の話を聞いて、大層愉快だ。』

三郎『聯隊は何です、あれは。』

太郎『聯隊かい、聯隊はね、師團の下に旅團といふのがあつて、其の旅團の下に、又聯隊があるんだよ。一師團は二旅團と騎兵、砲兵、工兵、輜重兵の幾らかづつとから出來て居て、一旅團は二聯隊から出來てるんだよ。』

二郎『ぢやあ兄さん、一師團の中には、四聯隊あるのですね。』

三郎『麻布の聯隊は、ありや何聯隊です。』

太郎『麻布聯隊は第一聯隊と、第三聯隊とだよ。第一聯隊は、第一旅團についてゐて、第一師團の中にあるのだよ。』

四郎さんは、默つて聞いて居ましたが

四郎『皆一ばかりだね。』

といひますと、三郎さんも

三郎『さうだね、一師團の、一旅團の、一聯隊、忘れやしないね、二郎ちやん。』

といひました。

母『けふは海軍のお話も、陸軍のお話も出て、未來の海軍大將や、元帥は大滿足だらう。海軍は、日露戰爭前は、世界の七大海軍國の、一番しまひの七番目だつたが、戰爭後には、……』

といひかけられますと

二郎『僕言ひませう、五番目になつたんですね。』

母『さう〳〵、それから陸軍は、日露戰爭前は十二師團だつたが、戰爭後には、……』

三郎『僕知つてます〳〵、十八師團になつたんです。』

かういつてゐると、さつきから、何かじつと考へてゐた四郎さんは、こんな事を尋ねました。

四郎『お父さん、いくつになると、兵隊にいくんですか。』

父『兄さん、お前いつて御覽。』

二郎『僕だつて知つてます。二十になつたら行くのです。』

太郎『二郎ちやんは、もう何年たつたらいくのかい。』

二郎『何年つて、僕今十四だから、もう六年たつたらいくんですよ。』

太郎『さうぢやないよ。滿二十歳だから、もう七八年たつたらいくんだよ。』

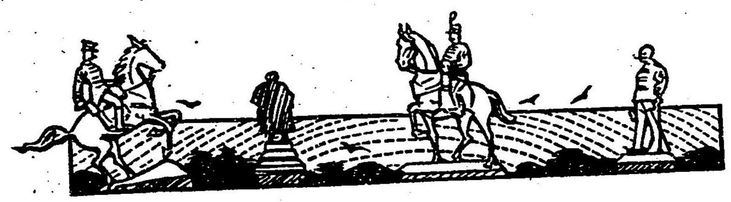
父『太郎少し曖昧だね。徵兵適齡の者と、兵隊に徵集される者とは、少しばかり違ふよ。』

二郎『徵兵適齡つていふのは、兵隊にいける年をいふのでせう。それから、徵集されるといふのは、兵隊檢査を受ける者が、呼び出される事でせう。それが違つて居るのですか。なぜでせう。』

父『少し違ふのだ。徵兵適齡者といふのは、數へ年廿一の者で、一月二日後に、生れた者がみなと、廿の者で、一月一日に生れた者丈とをいふのだ。それから、檢査に徵集される者は、數へ年廿一の者で、十二月一日より前に生れた者がみなと、廿二の者で、十二月二日後に生れた者とだ。』

太郎『一寸やゝこしいのですねえ。さうすると、まあ大概の者は、廿一になると、徵集されるので、十二月二日後に生れた者丈が、次の年にまはつて、廿二の年に徵集されるのですね。』

父『うむ、さうだ、その通りだ。』



二郎『やあ、僕は、十二月の二日生れだぞ。廿一の年になるぞ。損だなあ』。

太郎『さうだ、二郎ちゃんは、一日の事で、廿二になつてしまふのだ。僕は四月だから廿一だ』。

四郎『僕は、一月の十三日がお誕生だから、いくつの年です』。

太郎『四郎ちゃんは、廿一にいけるよ』。

三郎『僕は八月だから、やつぱり廿一の年ですねえ』。

五郎『僕は』。

二郎『五郎ちゃんのお誕生は、いつだい』。

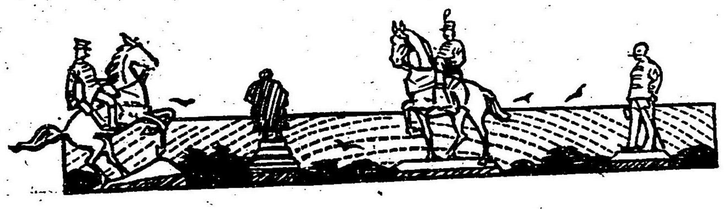
五郎『僕のお誕生は何でも十一月と思つてますよ』。

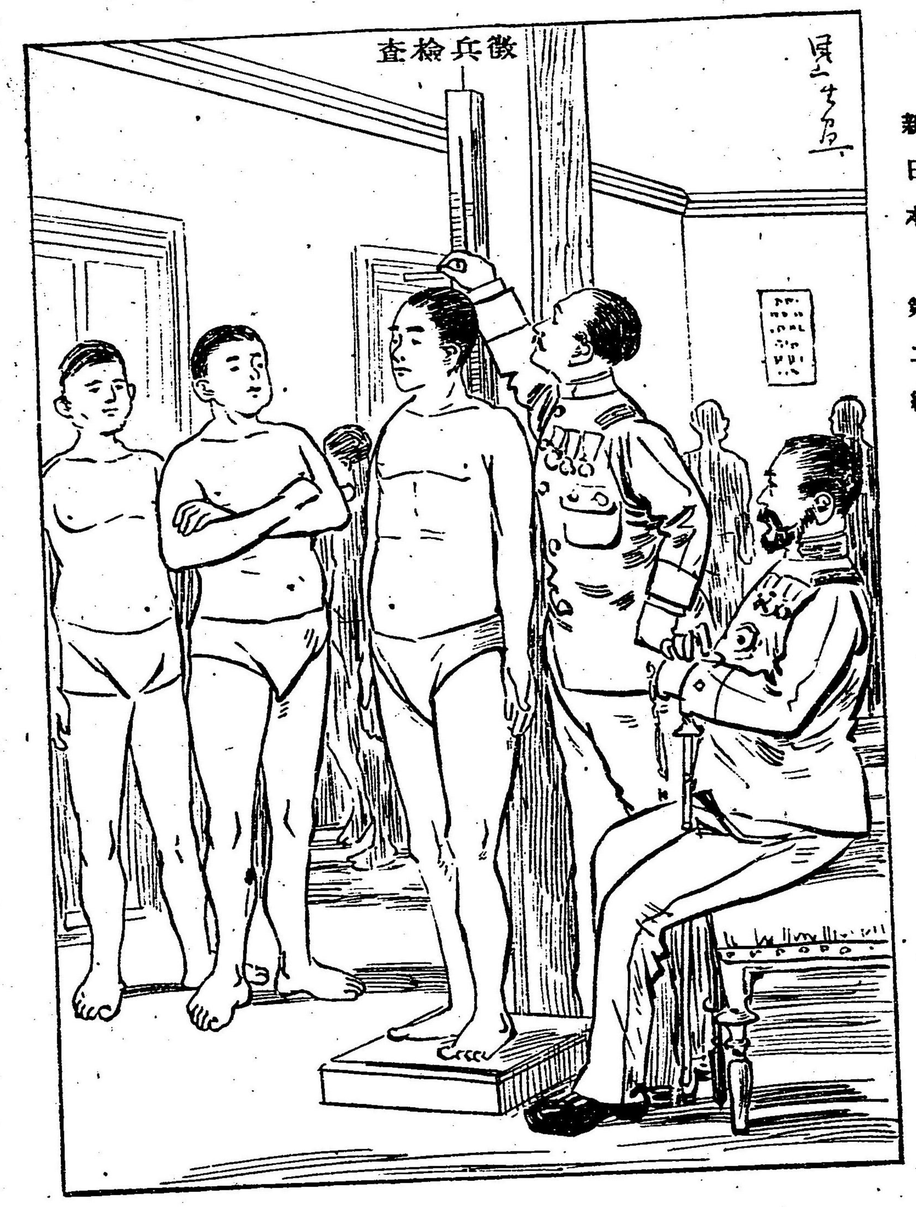
二郎『それぢやあ、廿一の年だよ。いやだね、僕だけ廿二で、あとはみんな廿一だ。つまらないねえ』。

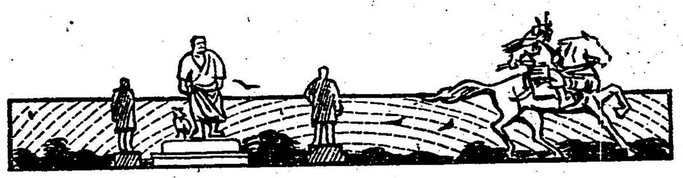
太郎『なに、それだけからだが立派になるから、いゝぢやないか』。

三郎『誰でも、廿一か、廿二になれば、みんな、兵隊にいくんだね』。

太郎『さうぢやないよ。毎年、日本國中から徴兵適齢者が、徴集されて身体を調べられるのを、徴兵檢査といふのだが、それで身体のわるい者は、







はねられてしまつて、からだのよい者丈が、合格するのだよ。うむ、合格といふ事かい、合格といふのはね、及第の事だよ。その合格した者が、又くじを引いて、くじに當つたら、はじめて兵隊にとられるのだよ。』

二郎『徴兵検査にはねられる様な、けちなからだはだめだね。三郎ちやん。』

太郎『さうとも、丈が低くても、いけないんだし、むつかしいよ。』

父『は、、、、、まあお前達は、大丈夫だ。立派になり

さうだね。身体は、大事にしなければいけないよ。』

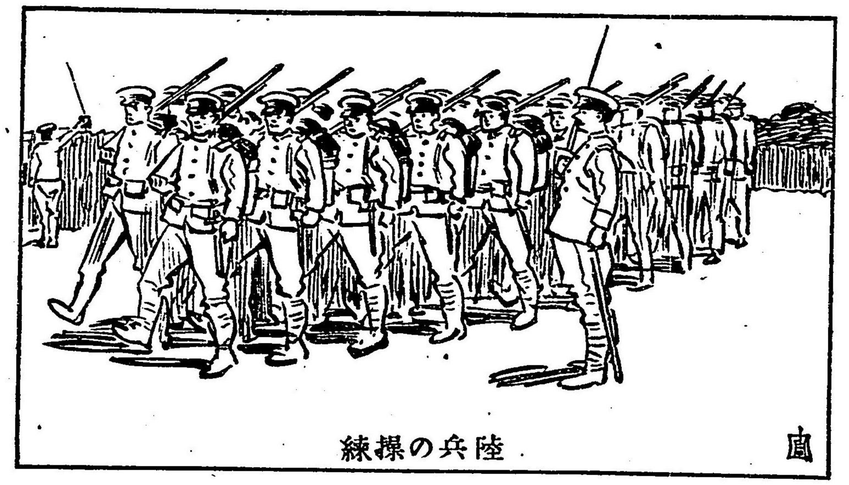
花子『ほんとうに、みんな、しつかりした身体でございますねえ。』

二郎『お父さん、兵隊にいつてる間は、二年ですね。』

三郎『なに、三年だよ。』

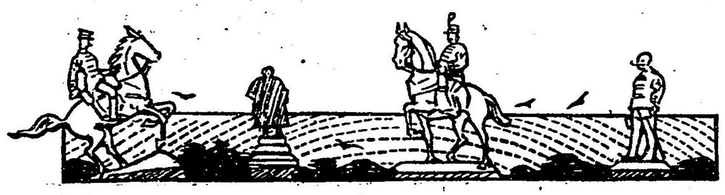
太郎『もとは三年だつたが、こんどから、二年になつたんだよ。ねえ、お父さん。』

父『いや、三年は矢張三年なんだ。けれども、勤務を仕上げた者は、二年の末に家に歸れることになつたんだ。それも歩兵に限るのだ。』



陸兵の練操

母『あゝ、母さんは、面白いお話を聞いた事があるよ。ずつと前には、兵隊に號令をかけるのに、左、右といつても、どつちが左か、右か、わからない者があつて、間違つてばかり、居るものだから、仕方なしに、茶碗、箸、茶碗、箸と、



いつたさうですよ。今から考へると、うその樣なお話ですねえ』。

といはれたので、みんなが、

皆々『あはは、、、、、おほ、、、、、これはをかしい。ほんとの事ですか。へえー、丸で小さい小供より、ひどい樣でございますねえ』。

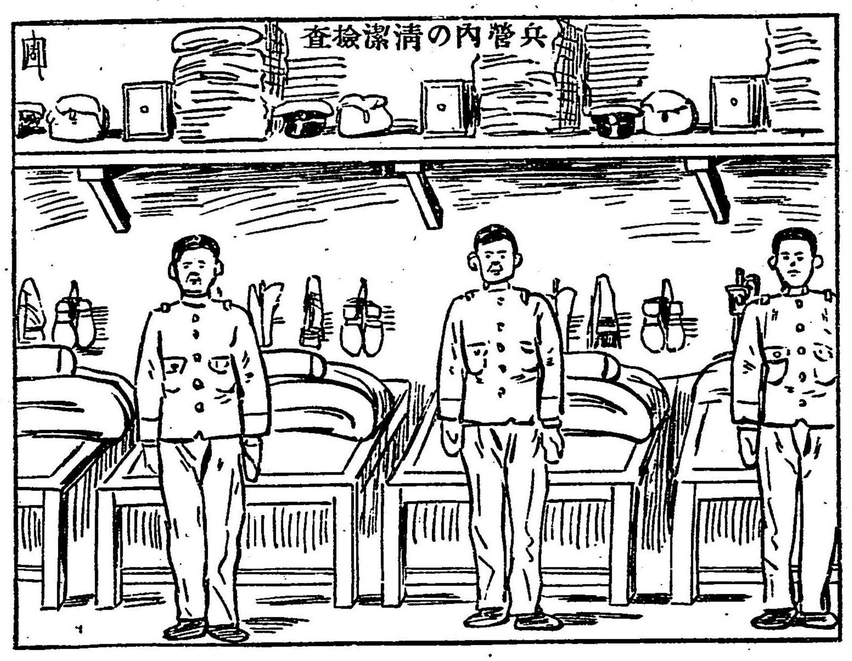
などといつて、笑つてゐる中にも、二郎さんは、

二郎『僕一つ、こんど學校へ行つて、皆を笑はせてやらうか。實にをかしいねえ。茶碗、箸、茶碗、箸か。はは、、、、。四郎ちやんどうだ、清ちやんや吉ちやんに、號令かけてやらないかい』。

などといつて、しばらく大笑ひをしました。花子さんは、

花子『成程、むかしは、さういふ時も、ございましたかねえ。ずぼんの前後を、とりちがへて、はくやうな、をかしな事も隨分あつたさうでございますねえ。ほんとうに茶碗、箸の時代から見ると、今は進んだものでございますねえ』。

父『それだから、もとは三年の間、兵士を訓練したのだ。けれども今では、もと三年かゝつてした



仕事も、二年で覺えるだらうといふので、二年でも歸れることになつたのだよ。』

『どうも教育といふものは、ありがたいものでございますれえ。左、右といふ號令は、今は、四つ五つ

の小供でも、能く言へますし、又立派に號令通り歩いても行きますが、全く教育のゆきわたつた、おかげでございますれえ。』

とおつしやつて、更に小供等に向つて、

『お前達は、先生のおつしやる事を能く聞かなければ、立派な人にはなれませんよ。先生のおつしやる事に、一つでもわるい事はないのです。先生は、お前達の爲を思つて、何でもよく教へたり、世話をやいたりして下さる。中々、一通りのお骨折ではありませんよ。けふは、みんな

先生のおかげで、立派に證書を頂けたのです
から、先生の御恩を忘れない様にして、よつく
先生を敬つて、少しでも先生のおつしやる事
を背かない様に、一層勉強しなければなりま
せんよ。』
とおつしやると、みんなは口々に『はい、はい、はい。』
といひました。
それから、お話は又さつきの兵士の事にうつ
つて、
太郎『兵士は二年の間、兵營に行つて居て、現役がす

むと又家へ歸つて、それぞれ仕事をするので
すねえ。日本は、國民皆兵といふ仕組で、男子は
だれでも、滿十七歳から滿四十歳までは、兵役
の義務があるのですねえ。』
といふと、一生懸命に、聞いて居た四郎さんが、
四郎『兄さんのいふ事はむづかしいねえ。ちつとも
わからないよ。』
といひますと、そばに居た靜子さんも同じ様に、
靜子『ほんとうに難かしくつて、あたしにもわから
ないの。兄さん、今何の事をいつたのです。』

二郎『あれはれ、日本の男は、十七から四十になるまでは、お國に戰爭でもあれば、何時でも出なければならんといふきまりがあるのだよ。その事を、兄さんがいつたんだよ。』

三郎『あ、それでもさつき何ぢやありませんか、廿一か廿二になつたら、兵隊にいくんだと、いつたぢやありませんか。ちがふよ、變だね。』

といつて不審がりますから、太郎さんは、

太郎『それは兵營にいつてけいこをする、現役兵といふ兵隊になる者の事さ。少しむづかしいが

大きくなつたらわかるよ。』

といつて置いて、それから又、お父さんに向つて、

太郎『お父さん、海軍の方は、たしか志願してなるのでしたね。』

と聞きますと、お父さんは、

父『さうだ。海軍の方は、水兵になりたいと、志願する者や、又多く海邊にゐて、始終海に慣れて居る者の中から取るのだ。海軍は身体の檢査がよほどむづかしいよ。海軍の水兵は、陸軍の兵士よりも、もつと丈夫でないと、堪へられない

かられえ』。

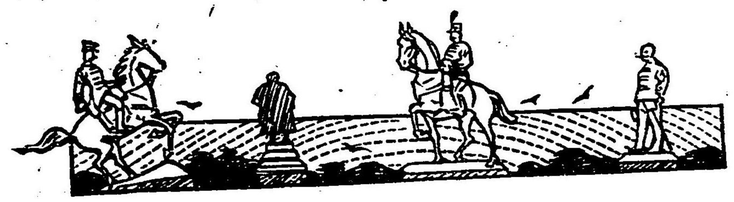
五郎さんは、むづかしいお話で、わからない事が、澤山あるものですから、時々女中の方へいつて、繪を書いたり、お伽ばなしをしてもらつたり、又、お母さんのそばへ來たりして居ましたが、この時むかうの方から走つて來て、

『五郎、母さん、今竹つてば、ばかな事いふんですよ。「ぼつちやま、たけの方に居た、お化のお話して、あげませうか」。なんていふんですよ。僕をかしくつてをかしくつて「お化なんか居るもんか」つていつてやりました。ね、母さん、お化なんか居やしませんね』。

といふので、お母さんは笑ひながら、

『さうですとも、お化なんか、居やしませんよ。竹がからかつたのでせう』。

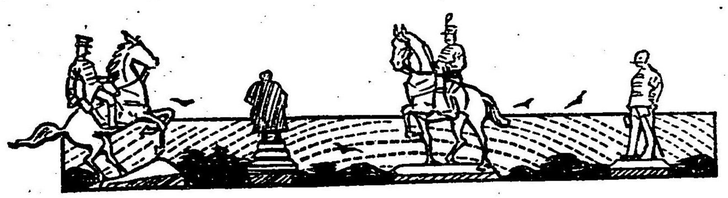
といはれました。みんなも五郎さんの言ひ樣が、あまりをかしかつたものですから、思はず笑ひました。五郎さんのいつた、竹といふのは、いつでも、面白い事をいふ、女中の名であります。みんなが、大笑ひをした後で、お父さんは、



『大分、陸軍や海軍のお話が出たね。二郎と三郎とは、軍人が好きで、軍人になるといつてゐるが、其れもよい、軍人は、勇ましい花々しいものだね。併し軍人に限つた譯でない、實業家でも、政治家でも、教育者でも、學者でも、又醫者でも、何でも、立派な者になればいいのだから、自分の好きなものになるがよい。そして、何になつても、正しい、まじめな人にならなければいけないよ。併しまあ、太郎はじめ男の子は、自分が兵役につかなければならないし、又花子や靜子は、自分には兵士にはならないけれども、うちに兵士になる者があるのだから、これから、お父さんが軍隊の精神といふものを、話して聞かせてやらう。尤、靜子や、四郎や五郎には、まだよくわかるまいが、少しは分る事もあるだらう、まあ聞いてるがいい』。

とおつしやつて、軍隊の精神とする處、即軍人に下し賜はつた勅諭を、お話しになりました。

『軍隊の精神といつてれ、苟も軍人たる者は、かういふ心がけで居なければならんと、仰せに



勅諭のお話

なつて、軍人に下し賜はつた、勅諭といふものがあるが、太郎は知つてるかい。』

太郎『よく知りません。』

父『花子はどうだね。』

花子『私も一度伺つた事がございますが、よくは覺えません。何でも禮儀を正しくせよとか、質素にせよとか、いふ事があつた樣にも存じますが。』

父『さう、それだそれだ。ぢやあ、お父さんが話してやらうかな。』

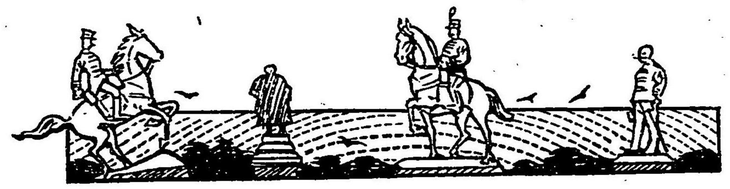
軍人に下し賜はつた、勅諭といふのはね、つまんでいふと、五ケ條の訓諭になるのだ。いいか、よく聞いておいで。』

とおつしやると、花子さん太郎さんはいふまでもなく、小さい四郎さん五郎さんまでが、お母さんのおさしづで、ちやんと行儀よく、形を正しました。お父さんはなほ語をつゞけて、

父『一、軍人は忠節を盡すを本分とすべし。

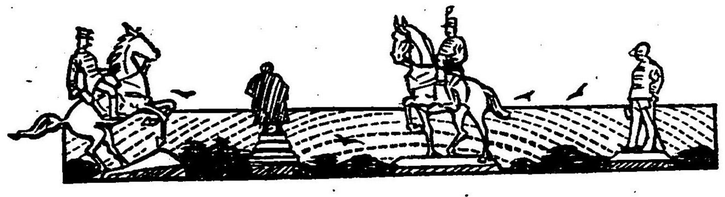
といふのがはじめで、

一、軍人は禮儀を正しくすべし。

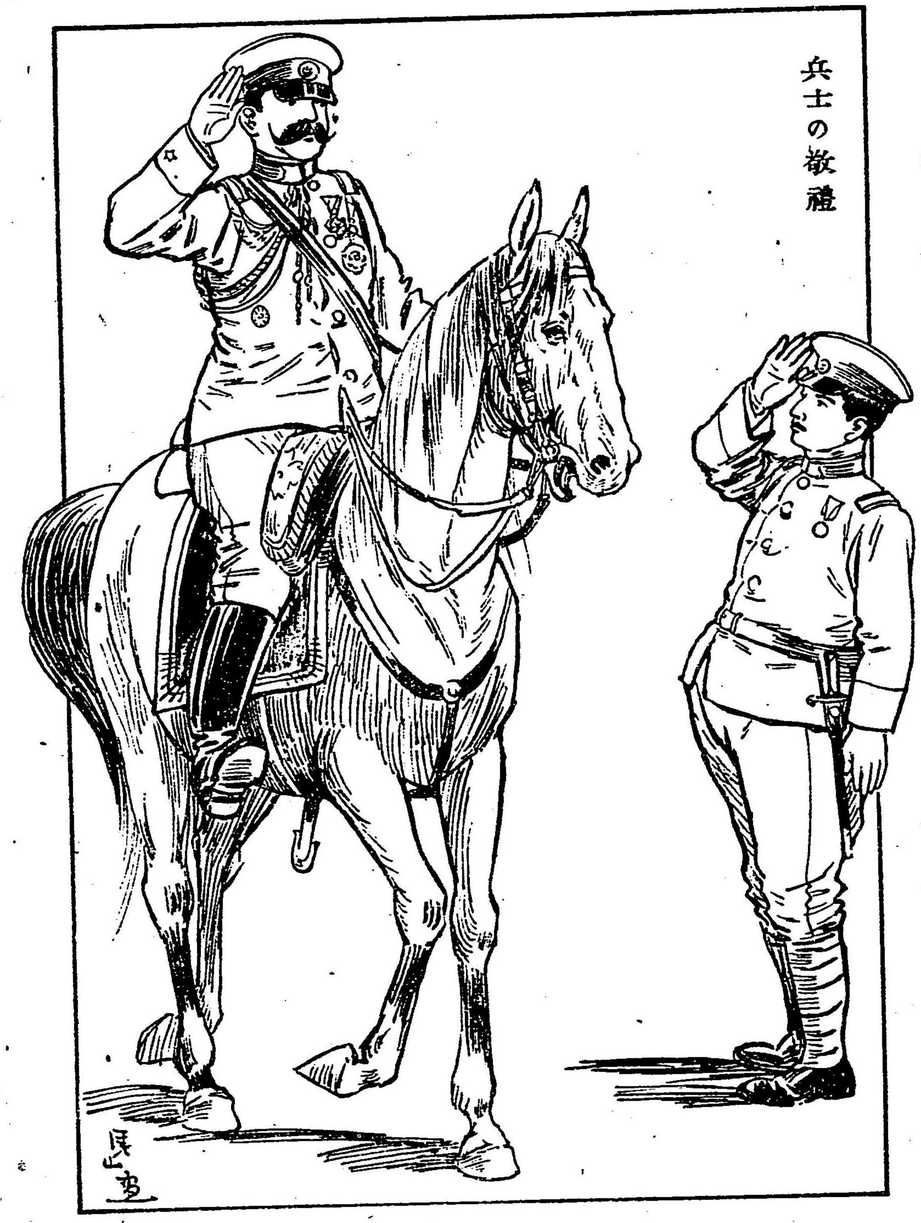


これで二つ、それから、
一、軍人は、武勇を尚ぶべし。
これで三つ、それ、その次は、
一、軍人は、信義を重んずべし。
これで四つ、いいか、第五には、
一、軍人は、質素を旨とすべし。
これだけだ。この五ケ條は、軍人たる者が、片時も忘れてはならぬところで、之を、行つて行くには、一つの誠心が大事だといふ事を、お諭しになつたのだ。』

太郎『さうですか。それでは、其の五ケ條の御訓諭を、善く覺える事にいたしませう』
父『さうだ。今いつた一番初めの「軍人は忠節を盡すべし」と、仰せになつたのは何の事だ、二郎いつて御覽』
二郎『それはやさしいですねえ。忠節を盡すべしといふのは、忠義を盡せといふことです。戰にいつても、死ぬのを恐れないで、天子様の爲に盡せといふのです』
父『さうだ。そうでなくては、戰にも勝てないだら



兵士の敬禮



う。よし〳〵。第二の「軍人は禮儀を正しくすべし。」と仰せになつたのは、これはどういふ事か、こんどは三郎に聞かう。

三郎『僕ですか、禮儀を正しくすべしといふのは、先生に逢つたら、ちやんと御辭義をしろといふ事なんでせう。』

父『はあ……、成程……、しかしね、三郎や、これは軍人に下し賜はつた勅諭だよ、軍人の間で、禮儀を正しくせよといふのは、どんな事だらう。』

三郎『あゝさうですか。軍人には大將もあるし、中將

もあるし、又ずつと下の大尉や少尉もありますね。その下の方の軍人が、上官に逢つた時分には、叮嚀に敬禮をしろといふ事なんでせう。』

父『まあさうだね、太郎は。』

太郎『逢つた時にだけ、敬禮するのぢやありません。どんな場合にでも、敬禮を盡せといふのです。それですから、上官の命令も、背かないやうに能く守つて、行かなければならないのです。』

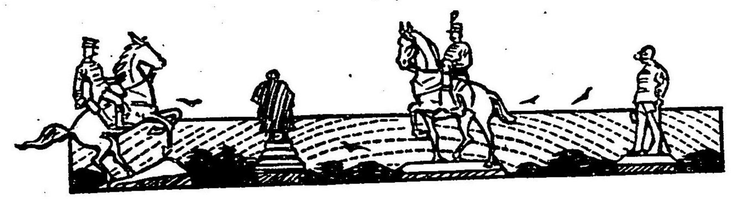
父『さうだ。軍人といふ者は、上官の命令を能く守つて、何を言はれても、背かない樣にしなければ、サアといふ時分に、上官の手足の樣になつて、働く事が出來ないだらうね。二郎、わかるか。それから、又同じ大尉の中でも、遲く大尉になつた者は、早くから大尉になつて居る者のいふ事は、能く聞かなければならんのだ。』

二郎『其の次は何だつたつけ。』

太郎『第三は、「軍人は武勇を尙ぶべし。」だよ。』

父『さう、武勇を尙ぶべしといふのは、何の事かい。二郎いつて御覽。』

二郎『勇氣がなくつては、いかんといふ事です。』



花子『ほんとうに、誰にも勇氣は大切でございますが、軍人に勇氣がなくて、戰場へ出た時卑怯であつたら、役に立ちませんはねえ。』

父『さうとも、軍人が卑怯では、さつぱりだめだね。日本人は、隨分武勇に富んでゐるねえ。それから、其の次に仰せになつたのは、太郎、お前どうだ。覺えてゐるか。』

太郎『其の次は「軍人は信義を重んずべし。」と、仰せになつたのです。この信といふのは、まことといふ事で、自分の言ふ事を踐み行つていく事、それから、義といふのは、自分のすべき事を盡していくのを言ふのです。』

父『うむ、太郎は太郎だけで、又說明が詳しいねえ。』

母『ほんとにさうでございますねえ。やはり違ひますねえ。中學は、中學丈の事がございますよ。』

父『これで四つすんだ。もう一つは何だつたか、花子いつて御覽。』

花子『一番おしまひには、「軍人は質素を旨とすべし。」と仰せになりました。』

三郎『あゝさうだつた、僕今考へて居たんだ。』

父『どうだ三郎、何のことか、説明が出來るか。一寸むづかしいねえ。二郎いつて御覽。……おや靜子が居ないぞ。』

花子『えゝ今お母さまと一しよに、あちらのおへやまで參りました。呼んで參りませうか。』

一寸こゝで言つておきますが、靜子さんは、大さう可愛らしい、色の白い、それはそれは、りかうなお子なのです。一体朝日さんのお家には、女の子はたつた二人しかないのに、靜子さんがまだ小さくつて、可愛いお子だものですから、お父さんは、大さう靜子さんを、可愛がつて居らつしやるので、今もこんなにお尋ねになつたのであります。花子さんが『呼んで參りませうか』と、いつたので、お父さんは『いや、そのうちに來るだらう』と言つていらつしやると、靜子さんは、ビスケットのお皿に盛つたのを持つて來て、

靜子『これ母さんから下すつたのよ。さあ皆さんお、あがりなさい。』

と大人らしいものいひぶりをしましたので、お父さんは、

父『静ちやんは、大層姉さんらしい事をいふね。』

といつて笑はれました。四郎さん、五郎さんは、第一にビスケットをいたゞきました。

二郎さんは、お父さんの「質素を旨とすべし」とは何の事か、いつて見ろと、おつしやつたのに答へて、

二郎『質素といふのは、着物でも何でも驕らない事をいふのです。軍人といふものは、外の飾りなんかの事に氣を取られると、軍人のきつい武勇な處もなくなつてしまひますから、それで

質素にしろとおつしやつたのです。』

父『うむ、中々上手にいへた。その通りだ。』

母『今お話の勅諭は、いつ下し賜はつたものか、知つて居ますか。』

太郎二郎『知りませんなあ。』

花子『存じませんねえ。』

母『あれは、明治十五年の一月四日に、お下しになつたのですよ。』

二郎『十五年ですか。ぢやあ、教育の勅語よりは、八年も前の事ですね。』

四郎五郎お休みの挨拶

太郎『あゝそうだ。八年前だね。さう覺えて居れば、忘れやしないね。』

花子『十五年だつても、覺えいい數ですわねえ。』

五郎『あゝ、もうねむたくなつちやつた。』

母『さうかい、大層長くお話をしましたね。もう何時かね。……さう、七時半、それぢや、五郎さんと四郎さんはもうお休み。』

『父』もうれる時間かい、ぢやあおやすみよ。けふは實に久しぶりで、みんなとお話して、大層愉快だつた。』

二郎『實に面白かつたね。けふ聞いた事を皆覺えて居れば、よほどえらいもんだね。』

かういつてゐると、四郎さんと五郎さんは、行儀よく兩手をついて、お休みなさいといつて、床につきました。

お父さんは、太郎さんに、少し學校の話を聞きたいから、書齋へお出でと、おつしやつて、太郎さんを連れて、あちらへいらつしやいました。

その後で、大きな聲で、

『我等ハ、日本男兒ナリ。世界デ強イハ我等ナリ。幾千艘ノ軍艦モ、幾百万ノ大軍モ、少シモ恐ルル事ハナイ。我等ノ持ツテ居ル鉄砲ニ、大和魂ノ玉コメテ、一度ニズドントウツテヤロ。』

といふ唱歌を、さも勇ましさうに、うたつて居るのが聞えました。

校外讀本

新日本　第二編　終

教育資料研究會編纂

尋常小學校外讀本　三學年用四冊　四學年用四冊

尋常小學校外修身書　二學年用二冊　四學年用二冊

高等小學校外讀本　一學年用四冊　二學年用四冊　三學年用四冊　四學年用四冊

高等小學校外修身書　一學年用二冊　二學年用二冊　三學年用二冊　四學年用二冊

高等小學校外地理書　一學年用二冊　二學年用二冊　三學年用二冊　四學年用二冊

高等小學校外日本歷史　一學年用二冊　二學年用二冊　三學年用二冊　四學年用二冊

高等小學校外理科書　一學年用二冊　二學年用二冊　三學年用二冊　四學年用二冊

定價一冊金拾貳錢郵稅一冊四錢一學年用十二冊金壹圓四拾四錢但十二冊一時に御申込の節は送料本社持の事

明治三十八年一月一日印刷
明治三十八年一月七日發行

著作權所有　定價金拾貳錢

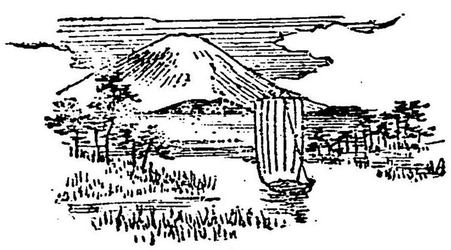
著作者　教育資料研究會

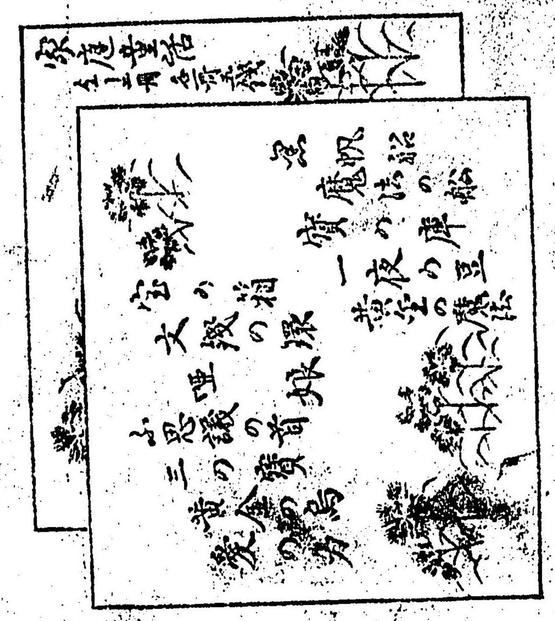
發行兼印刷者　株式會社資合　海學指針社
東京市日本橋區通旅籠町十一番地

代表者　社長　前川一郎
東京市本郷區弓町一丁目二十六番地

印刷所　開文舍
東京市神田區柳原河岸十二號地

發兌元　株式會社資合　海學指針社
東京市日本橋區通旅籠町十一番地





校外
讀本 新日本 第2編

国立国会図書館

049153-000-2

特67-951

校外読本新日本　第2編

戸野　みちゑ/著

M38

BEL-0060